http://decfamily.p1.bindsite.jp/2018/

We 35R

No.389　18/06/13

万引き家族　続き

前号で角田光代さんの評を紹介した映画「万引き家族」を私の主人が見てきた。ちなみに、私のユナイテッド・シネマのカードを使って（私のポイントを使って）安く見てきたのである（怒）が、こんなところで無益な争いは避けたかったので、あらすじと感想を聞いたところ、あらすじの方は、「おばさんの解説」の常として、やたら細部にこだわったかと思うと、いきなり話が飛んだりして、どうも焦点がぼけてよく分からなかった（笑）のだが、感想の方は角田さんとよく似たことを言っていた。そこで、角田さんの評を紹介したところ、「さすが、作家さんというのはうまく表現するものだ」とか何とか言いながら、同じ視点だったことを喜んでいるようであった。

その感想というのを、もう一度角田さんの評で紹介すれば、

> よく理解できないこと、理解したくないことに線引きをしカテゴライズするということは、ときに、ものごとを一面化させる。その一面の裏に、側面に、奥に何があるのか、考えることを放棄させる。善だけでできている善人はおらず、悪だけを抱えた悪人もいないということを、忘れさせる。善い人が起こした「理解できない」事件があれば、私たちは「ほら、悪いやつだった」と糾弾できる。なんにも考えず、ただ、ただしい側にいるという錯覚に陶酔することができる。そんな、シンプルで清潔な社会への強烈な違和感がこの映画から立ち上ってくる。

というものである。もちろん、こんな格好良く表現されたわけではないが、ほぼ同じような感想を抱いたようだ。

だから、この映画では「万引き家族」を「イイ家族」として描いているわけではない。もっとああすればイイのに…とか、こんなことだからダメなんだ、なんでこんなことやってんだ、という場面も多いのだそうだ。しかし、そういうことも含めて一つの家族なのであり、その姿が丁寧に描かれているとのことである。また、パルムドール審査員長のケイト・ブランシェットさんのコメントにもあったが、安藤サクラさんの演技が本当にすごくて感動したとも言っていた。

というわけで、わけの分からないあらすじ説明を聞かされたにもかかわらず、やっぱり見てみたい気になった。

ついでにいうと、角田さんの評に

> 作品のなかで、父親が息子に読み聞かせるのは『スイミー』という絵本だ。

という一節があるのだが、主人によるとそれはどうも間違いとのことである。『スイミー』は『スイミー』らしいのだが、父が読み聞かせるというのが違うらしい。新聞が間違えたことを掲載するとは思えないのだが、これまた無益な争いは避けることにして頷いておいた（笑）。

＊

ただし、どうも私はケチなので、こういう家族劇みないたものを劇場で見たいとは思わないのである。劇場の大画面・大音量（最近は椅子が画面に合わせて揺れたり、ミストが出たりする会場もある）を楽しむためには、やっぱり大迫力のＳＦとかアクションものとか、そういう作品じゃないとね。